余白の愛

小川洋子

余白の愛

小川洋子

福武書店

小川洋子（おがわ　ようこ）
一九六二年、岡山県に生まれる。
早稲田大学文芸科卒業。八八年、
「揚羽蝶が壊れる時」で第七回「海燕」新人文学賞を受賞。九一年、
「妊娠カレンダー」で第一〇四回芥川賞を受賞する。著書に『完璧な病室』『冷めない紅茶』がある。

余白の愛

一九九一年一一月一一日　第一刷印刷
一九九一年一一月一五日　第一刷発行

著者　小川洋子
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―一八
〒一〇二　電話（〇三）三二三〇―二二三二
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©Y.Ogawa 1991
Printed in Japan

ISBN4-8288-2405-7 C0093
NDC913 196 236p

余白の愛

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

1

わたしが初めてYと会ったのは、F耳鼻咽喉科病院の裏手にある、古いホテルの小部屋だった。

そのホテルはとある侯爵のお屋敷を改装したもので、建築学のうえでは貴重な様式の建物らしかったが、ホテルとしてはさほどにぎわっていなかった。二十にも満たない客室と、レストランとバー、あとは離れに侯爵のコレクションを展示した、ささやかな美術館があるだけだった。

耳を病んでF耳鼻咽喉科病院に入院している間、病室の窓からマロニエ越しに、ホテルの車寄せをよくぼんやり眺めていたが、そこに車が横付けされることは一日数えるほどしかなかった。手持ち無沙汰のドアボーイが奥へ引っ込んでしまうと、そこはいつも礼拝がすんだあとの教会のように静まりかえっていた。

F病院を退院して二日めの午後、ある座談会に出席するためにわたしはホテルを訪れ

た。玄関の回転扉はステンドグラスをはめ込んだ年代物で、把手を押すとぎしぎし微かな音をたてながら動いた。わたしはとっさに、またあの厄介な耳鳴りが始まったのかと勘違いし、その場に立ち止まって目を閉じた。扉の音がいつもの耳鳴りと同じように、とても深い所から響いてきた気がしたからだった。退院したばかりで、わたしはまだきちんと音の区別をする自信がなかった。耳鳴りの予感がする時は、こうして目を閉じているよりほかに方法がなかった。

「どうかなさいましたか」

ドアボーイが心配そうに声をかけた。

「いいえ、何でもないんです」

わたしは目をつぶったまま答えた。

「ご気分でも……？」

「いいえ、本当にご心配なく」

背中で回転扉がゆっくり静まった。それと一緒に耳鳴りの予感も遠のいていった。一秒か二秒の、わずかな間だったと思う。

「もう大丈夫ですから」

そう言ってわたしは目を開いた。ほんの少し、めまいがしたような気がした。ドアボー

イが微笑みながら、わたしを中へ招き入れてくれた。

部屋に入ると、わたし以外の出席者はもう皆そろっていた。八人掛けのテーブルと椅子だけで一杯になるくらいの広さだったが、天井の四隅やカーテンレールの先にまで凝った彫刻がほどこしてある贅沢な部屋だった。暖炉を背にした椅子に、真珠色のスーツを着た中年の婦人と、白人との混血らしい青年、壁側の椅子に主催者の雑誌編集者の男性、そしてテーブルの角にYが坐っていた。南向きの窓から差し込む秋の陽が部屋に満ちていた。テーブルクロスも水差しも青年のこがね色の髪も、光に包まれていた。ただYの椅子だけは、光の裏側の透き間に入り込んだように淡く陰っていた。わたしは遅くなったおわびをしたあと、Yの隣に腰掛けた。

「それではそろそろ始めさせていただきます。今日はお忙しいところ『健康への扉』の特集記事〝私はこうして突発性難聴を克服した〟の座談会にお集まりいただき、ありがとうございます」

編集者は丁寧に頭を下げた。

「この〝私はこうして○○を克服した〟のシリーズは大変好評でして、先月号のバセドウ氏病もその前の不眠症も、全国から大変な反響がありました。今回、F耳鼻咽喉科病院の

ご協力を得て、皆様の貴重な体験を是非有意義な記事にしたいと考えております。ご自身のお身体に関することですし、また難聴はデリケートな病で、お話になりにくいこともあるかと思いますが、雑誌にはお顔はもちろんお名前も伏せて掲載いたしますので、どうかご自由にざっくばらんにお喋りしていただければと思います」

わたしたちは緊張気味にうなずいた。

「ではまず、最初の症状が現われた時の様子を、こちらからお一人ずつお願いします」

編集者は中年の婦人に目で合図した。

彼女は膝の上のハンドバッグに手をやり、止め金を二三度カチカチいわせながら話し始めた。

「はい。私の場合、ある朝、目が覚めたら、すべての音が全部消えてなくなっていたんです」

その時わたしは、Yが速記者であることに気づいた。婦人が最初の言葉を発するのと同時に、彼がボールペンを紙の上で動かし始めたからだ。鼻に掛かった頼りなげな彼女の声がこぼれ落ちたのと、彼の指がボールペンを滑らせた一瞬が、あまりにもぴったりときれいに重なり合っていたので、わたしは手品を見ているような不思議な気分になった。そしてその一瞬は、手品のハンカチーフから舞い降りてきた鳩のように、しばらくわたしの中

にとどまっていた。わたしは彼女の唇とYの手元を、さり気なく交互に見比べた。婦人は話を続けた。

「最初は、庭に雪が積もったのだと思いました。子供の頃、雪の朝に、これと同じようなしんとした空気を感じたことがあったからです。でもすぐ、ばかげていることに気づきました。カレンダーは六月だったんです。私はどうしていいか分りませんでした。静か、というのとは全然成り立ちが違うのです。耳の中が隅から隅までどこまで行っても真っ白なんです。試しに耳の穴を押さえてみたり、頭を振ってみたり、髪の毛をかきむしってみたりしましたけれど、ますますその白さの度合が濃くなるばかりで、何の効果もありませんでした」

彼女はテーブルの中央で回っているテープレコーダーのあたりに視線を落とし、あらかじめ用意してきた文章を暗唱するように、手際よく自分の耳について説明していった。その間ずっと、Yのボールペンは彼女の声に寄り添っていた。

「私は怖くなってベッドの中でがたがた震えました。一晩のうちに、耳がなくなってしまったんだと、絶望的な気分でそう思いました。確かに外側だけは残っているけれど、一番肝腎な耳の中身がどろどろに溶けて穴をふさいでしまったんだと。震えは身体中の骨がばらばらになるのかと思うほどひどいものでした。それも突発性難聴の症状の一つなのか、

ただ精神的なものだけなのかは分りません。そのうち吐き気もしてきました。脳味噌の中を走っている無数のか細い神経が、一斉にけいれんを起こしてしまったんです」

「つまり最初は、無音と震えと吐き気ですね」

整理するように編集者が口をはさんだ。

「はい」

婦人はうなずいて、コップの水を一口飲んだ。

そのすきにYは手元の紙を一枚めくった。彼の指がわたしの視界の隅を静かに横切った。婦人の説明は続き、編集者は時々それを整理し、混血の青年はおとなしく耳を傾けていた。動いているのはYの手だけだった。彼の手の周りだけ、空気が特別な流れ方をしている気がした。本当は特別なものなど何もないはずだった。ボールペンも紙も書類入れも腕時計も指も、取り立てて特徴のないありふれた姿をしていた。ただ一つ、彼が書き記している速記用の文字を除いて。

わたしはその文字を見たくて仕方なかった。よどみがなく、伸び伸びしているけれど細やかな彼の手の動き方から、それがどんなに不思議で魅惑的な形をしたものか想像することができた。しかし光の具合も角度も位置も、すべてが彼の手元を陰にしてしまう微妙な所に、わたしは坐っていた。いくら目をこらしても、青いボールペンの先にあるものは見

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

えなかった。

最初に飛び込んだ総合病院の耳鼻科で乱暴な扱いをされたこと、その精神的な苦痛のせいで余計耳にダメージを受けたこと、無音の密度がどんどん深まっていったこと、そしてF耳鼻咽喉科病院にたどり着いてやっと治療がうまくいったこと。彼女の話はフランス刺繍の一針一針のように、細かく途切れなく連なっていった。

自分の耳について彼女が余りにもたくさんの言葉を持っていることに、わたしは圧倒された。順番が回ってきた時、どれだけきちんと説明できるか心配になってきた。病気をして以来わたしにとって耳は、身体の器官ではなく抽象的な観念のようなものになっていたからだった。彼女は時々、脂の浮いた額のファンデーションをハンカチで押さえ、コップの水滴を指でぬぐった。

途中、コーヒーを運んできたウェイトレスが何かのはずみでスプーンを床に落とした時だけ、彼女は口ごもり筋道が少しだけ乱れた。その一瞬、わたしと混血青年と彼女は同時にびくんと顔を上げ、不安な視線を合わせた。床は絨毯だったので、大した音がしたわけではなかったが、わたしたち三人にとってそういう不意の音は、共通のある怖さをもたらすのだった。編集者もYもそんなささいな音には気づいてさえいないようだった。わたしたち三人は、やはり同じ種類の耳を持っているのだった。

スプーンが取り替えられウェイトレスが出ていくと、ホテルはすぐにいつもの静けさに包まれた。
「なるほど、なるほど。それではこのあたりで、次の方のケースをお話していただきましょうか」
編集者が適当な所で区切りをつけ、今度は混血青年に目をやった。
彼はすばらしく美しい顔立ちをしていた。目や鼻や顎のラインが、尖った鉛筆でなぞったようにくっきりと光の中に浮き出ていた。もちろん耳も、病んでいたとは思えないほど整った輪郭を持っていた。彼が少しでも身体のどこかを動かすと、そのたびに髪の毛が揺れた。
「僕には最初、自覚症状なんてなかったんです」
彼は日本人と変わらない完全な日本語を喋った。
「大学に入学して三日めに健康診断があって、その時の聴力検査で異常ありが出ちゃったんです。それですぐ入院させられたもんだから、三日通っただけで大学は休学です。もっとも初めは、こんなに長引くとは思わなかったんだけど」
「どういう異常が出たのでしょう」
編集者が尋ねた。

「さあ、よく分りません。無口な医者だったから何も説明してくれなかった。ただ精密検査を受けてくれって言われたんです」
「聴力検査用の音は聞こえましたか」
「いいえ。聴力検査は講堂の片隅でやってたんだけど、ヘッドフォンを着けたとたん、隣でやっている視力検査のざわめきとか学生の足音とかがぐちゃぐちゃに絡まって、どれがどの音だかさっぱり分らなくなっちゃったんです」
「そうですか。でも、日常生活に支障はなかったんですね」
「はい。ただF病院で精密検査のためのいろいろな音を聞かされているうちに、と言っても正確にはほとんどの音が聞こえなかったか、あるいはありもしない幻の音が聞こえていたわけなんだけど、耳の奥に何かが詰まっているような気がしてきたんです。耳の穴の奥の奥の一番細くなった所に、何か柔らかいもの、そう、コルクみたいに堅いものじゃない、何と言ったらいいんだろ、たんぽぽの種みたいなものが引っ掛かっている感じなんです」
青年の説明は婦人に比べればいくらかたどたどしかった。
こんなふうに話し手が次々代わって、Yは混乱しないのだろうかと、わたしはふと心配になったが、ボールペンは決して立往生することはなかった。

真横に坐ったせいで、Yの顔の表情はよく分らなかった。肩の雰囲気や黒っぽい洋服の色合いや指の形や、そういう細切れの一部分でしか彼を見ることができなかった。それでも、働き続ける手を見ていさえすれば、確かに彼の息遣いを感じることはできた。それくらいひたむきに手は動いていた。Yのコーヒーは一口も飲まれないまま冷めていた。

「私にもありました。耳栓が奥に入りすぎて取れなくなったような不快感が」

婦人が青年の方に向き直って言った。

「あなたは柔らかいっておっしゃったけど、私の場合はとても堅いんです。コルクなんかよりずっと。入院していた頃の私の耳は、使い古した一セント硬貨で蓋をされているのと同じでした」

信じられないことに彼女は大ぶりのイアリングをつけていた。それは真珠色のスーツには明らかに不釣合いのトルコ石製で、休みなく髪の毛の中で揺らめいていた。重みで耳たぶが引きつっているようにさえ見えた。わたしにはまだイアリングをする勇気はなかった。今は少しでも耳のことを忘れていたいのに、あんな耳たぶの形が変わるほど大きなイアリングをつけたら、きっとわたしの頭は耳で一杯になるだろう。トルコ石の触れ合う音がどんどん大きくなって、他には何も聞こえなくなるだろう、と思った。

「あなたはいかがでしたか」

不意に編集者が発言を求めてきたので、わたしはあわててイアリングから目を離した。
「はい、確かに耳閉感はありました」
声がかすれている気がした。
「最初の自覚症状をお聞かせ願えますか」
編集者は資料のプリントをめくりながら言った。Yが疲れないようにできるだけゆっくり喋ろうと思った。
「ええ。でもわたしの場合、おとといい退院したばかりで、本当に治っているのかどうか自信がないんです。ですから、うまくお話できるかどうか……」
わたしの言葉もきちんと書きとめてくれるかどうか気になって、Yの指が視界に入るようにわざと視線をうつむき加減にしてみた。相変らず文字の形は見えないけれど、わたしの声がすみやかに白い紙の上に書き写されてゆくのが分った。わたしは安心した。
「朝、妙な音で目が覚めたんです。日常的に耳にするありふれた音じゃなく、もっと特殊な感じがしました。しばらくベッドの中で、それを聞いていました。そして今までに経験したことのある音をいろいろ当てはめてみました。それでたぶんこれは横笛、金管じゃなくて木管の、雅楽に使われるような横笛だろうと見当をつけたんです。ベランダの窓が二十センチくらい開いていたので、隣の家の人が横笛を練習しているんだ、と信じたんで

す。隣の人は結構名の売れているモデルさんで、とても横笛を吹くようなタイプの人には見えませんでしたけれど、でも、そう信じるしかなかったんです。確かに、横笛が聞こえるんですから」

Yの指は影のようにわたしについてきた。決して離れないけれど、追い越すこともなかった。

「私とは正反対ですね。何も聞こえないのと、何かが聞こえるのと」

婦人が言った。

「朝目覚めたら、突然に横笛を吹くモデルか。奇妙な病気だ」

青年がつぶやいた。

「でも本当に怖かったのは、横笛を吹いてる人なんて誰もいないことに気づかされた時です。窓を閉めてもシャワーを浴びても電車に乗っても、音は消えません。存在しない音が聞こえること、これがわたしを一番混乱させました」

「ええ、よく分るわ、あなたの気持」

婦人は何度もうなずいた。イアリングが一段と大きく揺れた。

座談会は思っていたよりも長く続いた。途中でカセットテープが切れ、素早くYがテープを裏返してプレイボタンを押し直した。窓から差し込む陽の光は、時間と一緒にわずか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo